

あを 12

2018



師走

ゆく年や

風にあらがふ日のひかり

万太郎



本塩沢お召

あそ

十二月



東京 佐藤 喜孝

リュウグウ

たかななは春の大地の力瘤
男親晴のリボンは春の風
彩雲や背面跳で越えるとき
起きて臥し五月の梢に行くてだて
ウインクは左に任す星祭
コンビニおにぎり123で秋日和
リュウグウはけふも快晴鬼ふすべ
おそ秋の雨におぼるる道の蜂



三重

長崎 桂子

小鳥来る

小鳥来る二階手摺の糞掃除
被害なき木立に憩ふ小鳥かな
名月や黒雲出でて肩落す
園児等の無心な舞踊秋の風
秋高し高校生の吹奏楽

東京

森 なほ子

飴の紙

秋の朝氣持ちいいねと声過ぐる
昼月や豆大福に豆透けて
遠山に白雲群る大根蒔き
秋灯や葉がはりの飴の紙
茸汁「こはい」に漢字二つある

東京

赤座 典子

秋祭

我が町と思へぬ人出秋の雲
竹馬で駆寄る猿に孫怯ゆ
秋祭初の輪投げは残念賞
抽籤の梯子車試乗秋の天
花茗荷右往左往の旅仕度

埼玉

秋川 泉

火焰茸

先客の聲がとぎれて秋の昼
ぽつぽつと語り始める月夜かな
朝靄の底よりぬつと火焰茸
「いいでしょ」と空に翳して糸瓜水
秋霖の音聞くだけの日曜日

東京 石森 理和

蔓梅擬

稲架の稲刈るを待つ稲煙立つ
吹抜けの天上たつぷり蔓梅擬
錆鉄路撓わな柿と枕木と
柿畑どの木も撓わ人氣無し
木漏れ日の一際返す冬椿

埼玉 大日向幸江

菊

神の留守猫を従へ散歩せる
カーテンを掛け替へ済みて冬仕度
朝寒のキッチン人を拒みをり
白菊や加賀麩料理に添へてあり
棗の実句会の行く時帰る時

東京 七郎衛門吉保

くずれ

茸の名「くずれ」なれども光る味
翡翠超ゆマイヤーレモンの深緑
ティンパニの音出しさうや榎櫃の実
花芒振るアレグロかアンダンテ
秋天の上昇気流鳶三羽

東京 篠田 純子

枯れ

向日葵の大いなる枯れ唐突に
塩害のポプラ並木の枯れ速し
シスターの靴下グレー秋の蝶
赤とんぼリビングの灯に狂ひ飛ぶ
死ぬことは忘れて生きる秋の風

石川 定梶じょう

夜なべ

一本がぬきんでて秋桜かな
秋の声早々頓首なん書けば
燈を消せば長大息す笹の檸檬
真葛原風の行きつくところかな
やめようと夜なべなかなか父は言はぬ

東京 須賀 敏子

この秋

エプロンを作る一日小鳥来る
野 仏 に 菊 の 三 輪 東 川
平成の美智子皇后誕生日
秋に逝く一つ違ひの樹木希林
見に行かな翔馬五年生「特選絵画」秋晴るる

東京 田中 藤穂

突く

ブロンドの膝突く女秋の雲
蒲の穂の白くほぐれし秋の駅
肘突いて秋思の人か居眠りか
あかあかと二間を灯し秋彼岸
鈴虫の大壺を置く土間の隅

東京 佐藤 恭子

鳩と

むかご飯茂出で来よ炊けました
いつの間に遠のく池の散り松葉
冬の草ためつすがめつ食ふゴリラ
冬日受く子猿の耳の大きこと
枯葉敷く階鳩とのぼりゆく

爪切って少し涼しくしたりけり 佐藤喜孝

百合の木の実の落ちてゐる橋の上 田中藤穂

まどろむや懐かしい顔秋の声 長崎桂子

秋灯や電気飴の次電気椅子 森なほ子

良夜かな遊び尽して孫帰る 赤座典子

栗御飯のほのかな甘味病む人へ 秋川 泉

虫の音や我が家を後に病床へ 石森理和

煮豆買ふ昭和の暮らし残る秋 大日向幸江

栗を剥くアーミーナイフと萩の皿 七郎衛門吉保

軟膏のふた見失ふ昼の虫 篠田純子

国境ひ河が朗々良夜にて 定梶じょう

曼珠沙華雨を留めて傾きぬ 須賀敏子

喜孝抄



新涼や烏が烏のそばにゆき 佐藤 喜孝

やさしくさりげない句。立秋に烏が烏のそばに行つたと、散文にすればそれだけのことですが、俳句のかたちをとると、別の味わいになるから不思議ですね。この烏、親子か、夫婦か、兄弟それとも恋人？か。ただの顔見知りならもつと淡い。暑さも峠を越えたと思われる日、なんとはなしに仲間のそばに寄つていく烏を見ている作者。(なほ子)

名画座で過ごす八月十五日 須賀 敏子

名画座は、主に旧作映画を主体に上映する映画館の総称。過去の作品を大きいスクリーンで観られるところが特徴的で、全国的に減少傾向にあるが、今なお指示され続けている。

終戦の日、八月十五日をその名画座で過ごされた

鴉二羽屋根にて喘ぐ暑さかな 田中 藤穂

一羽より二羽と暑さも倍増。今年の暑さは生きとし生けるもの全てが喘いだ、そんな猛暑さだった。(喜孝)

町外れ夏の野の花馨しき 長崎 桂子

町外れにお出かけになると夏の花が咲き競っている。そう云う所に作者はお住まいなのですね。この句から、さまざま夏の野草を思い浮かべ楽しみました。(泉)

登り来て噓せる香に満つ花茨 長崎 桂子

蕪村の「愁ひつつ岡に上れば花茨」を思った。桂子さんは愁ひてはぬない明朗な句。(喜孝)

鍼灸も漫画喫茶も星祭 森 なほ子

作者。なんとピツタリで、胸の奥にじんわりと迫ってくる句と思いました。(泉)

離れ住む妹ひとり夏畑 須賀 敏子

遠く離れて生活してゐる妹を思ひやる姉の気持ちなぜか夏畑がしみじみと伝はってきた。(喜孝)

接近の火星くつきり闇暑し 田中 藤穂

火星は、地球との位置関係(距離)によって明るさが大きく変わる惑星。二〇一八年七月三十一日、約二年二ヶ月振りに、火星と地球が大接近。二〇〇三年以来の大接近。この夏は、酷暑が続ぎ、七月三十一日は、気温三十六度もあり、夜になっても熱帯夜。しかし、闇の中にひときわ目をひく星は、赤くくつきり観られました。

本当に記憶に深くとどまる火星でした。(泉)

傳句会の日、八月の暑さ対策、商店街の風物詩として開催される「阿佐ヶ谷七夕まつり」をご覧になった作者。子供はもとより老も若きも沢山の人が繰り出している賑わい。そこを「鍼灸も漫画喫茶も」と云う切り取り方が素晴らしいと思いました。(泉)

風に雨気七夕飾りさざめける 森 なほ子

かすかな大気の変化を「さざめける」と捉へた繊細な句。(喜孝)

とりどりの秋果に迷ふ道の駅 赤座 典子

どちらの道の駅にいらしたのでしよう。秋の果物は山盛り豊作の図が目には浮びました。本当にどれにしようか……と迷いますね。楽しい買い物風景。そしてそこが道の駅って素敵ですね。(泉)

薄紅の芋莖をまづは小鉢にて 赤座 典子

旅先での夕餉でしょうか。いっぱい飲んで目が迷う膳の上。「まづは一献」ではなかった。(喜孝)

送り火や燃えてしばしの黙のあり 秋川 泉

送り火がぼつと燃え上がると、みなしばらくは黙って火に見入る。静かなひと時はすぐに終わり、みなそれぞれの浮世に戻ります。この「燃えて」は点火したことをさすのか、燃え尽きたことを言っているのか……今燃えているのでしょうか。(なほ子)

保冷剤首に巻き付け熱波避く 石森 理和

ほんとうに今年の暑さはこたえました。保冷剤を首に巻くというアイデア、気が付きませんでした！来年の夏はそれで行こう。たくましく熱波と戦う作

者の率直な句。(なほ子)

朝まだき紋白蝶のふはふはと 石森 理和

夏の句に紛れて一句春の句。朝まだき頃の紋白蝶の飛びやうを捉へられた。(喜孝)

名は風雅秋立つ朝に生まれけり 大日向幸江

立秋の朝に生まれるなんて素敵ですね！しかもその名が風雅とは、なんと風雅な。おばあさまの命名でしょうか。将来は俳人ですね。(なほ子)

澆刺と百才の日々雲の峰 大日向幸江

目出度い。雲の峰に負けない元気な百才。脱帽。(喜孝)

灼熱に蟻も速歩のアスファルト 七郎衛門吉保

灼けて熱いアスファルトを蟻も大急ぎで歩く。こ

の視点に思わず、本当に！と膝を打ちました。人も動物も昆虫も猛暑の辛い夏でした。細やかなあたたかい目の作者を感じる句と思いました。(泉)

日焼けして帰りのバスの砂がひんやり 篠田 純子

タイトルは葉山。ご家族で行かれたのでしょうか。「砂がひんやり」に実感があります。遊び疲れて帰りのバスはグッスリですね。明日は日焼けのひりひりで大騒ぎかも。まだまだお若い！(なほ子)

奮起せよ朝一湧いて雲の峰 定梶じょう

朝、外に出ると、これはこれは早くも雲の峰が湧きあがっています。まるで暑さにはばっっている人間にはっぱをかけているようだ。命令形が力強い入道雲にふさわしいです。私はこの夏、入道雲を一度もみませんでした。昔はよく見たのですが……暑さを避けて夕方出かけるコウモリ生活のせいか、東

京に入道雲は現れないのか、どなたか教えて頂きたいです。(なほ子)

啞蟬も少し声出す蟬しぐれ 定梶じょう

声を出してゐるかも知れない。いやきつと鳴いてゐると作者はいふ。作者の声かも知れぬ。それにしても「啞蟬」はよく禁止用語にならないものだ。(喜孝)

十月号訂正

梅雨に入る歩道に傾斜あるを知る 石森 理和

雨の日、ちょっとした段差や傾斜が足元を危うくしたりしてハツとする事があります。ふだん何気無く歩む道もそれ故梅雨に入ればより注意して……となりませぬ。作者のやさしいお人柄を感じます。(泉)



佐藤喜孝

篠田 純子

地下足袋で松の養生水の秋
秋しぐれ紅茶に溶かすママレード
コンクリのいけず石二個秋の暮

一句目。松手入れではなく、「松の養生」。弱った松の手当をしてゐるのであらうか。「水の秋」で大きな庭園が想像できる。

二句目。ひとときの安らぎの時。ママレードも手作りだと良い。大切にしたい時間である。秋時雨もその落ち着いた雰囲気に相応しい。

三句目。「いけず石」とは、「いけず」とは「意地悪」のことである。道路に置かれ、それ以上内側を通れない

ようにする意地悪な石であることから、このように呼ばれているのだと思われるが、定かではない。」と知る。京都に限らず東京でも見かける。隣家のいけず石は庭を潰して家を建てた時、庭石を家の角に置いた。幾たびかこの石で助かつてゐる。コンクリのいけず石は風流でない。新「秋の暮」である。

定梶しよう

螻蛄鳴けりきつと日暮が愉しいから
鰯雲ナザレの大王の息子かな
腹がたつてくる零餘子飯たべるうち

一句目。螻蛄の声を聞かなくなつてから久しい。鳴いていた頃も今と同じように家に取り囲まれてゐた。違ひといへば木造ではなくなつたことぐらい。庭といへる庭など何処の家にもない。変わりのない環境だとおもふのだが、螻蛄や蟋蟀、鉦叩や守宮などゐなくなつた。家にゐた蠅蜘蛛さえ見かけなくなつた。気がつけば確実に『沈黙の春』である。

で、螻蛄の鳴くことは螻蛄にとつても、螻蛄を聞く人も聞かぬ人にも日暮が愉しいことである。きつとさうである。

二句目。イエス・キリストの出自をかう表現することにより、一歩キリストに近づいたやうな親近感を覚える。無宗教のわたしにも鰯雲がひろがる大空に神ではない人間としてのキリストを思つた。

三句目。読後にやつとする。

わたしも妻も零餘子飯が好きである。好きになるきっかけがある。ある日高島茂が時代の付いたアルミの弁当箱に零餘子飯を炊いて持つてきてくれた。以来茂さんのことが好きだった妻は山野で零餘子を見付けると持つて帰つた。わたしも発泡スチロールの箱に自然薯を育ててゐる。零餘子を探るためである。今年も十粒に足らぬほどの収穫を仏前に供へた。この句の「腹がたつてくる」が何ともユーモラスである。零餘子飯ではなく自分に腹をたててゐるところがおもしろい。零餘子を探つてきて炊いて食べてゐるうちに腹がたつてくるといふのである。でもまた来秋には零餘子飯を炊いてゐることであら

う。

須賀 敏子

珍しく夫のゴルフや秋茜
コスモスに夢中になればあのこづち
久々の国会中継柿をむく

一句目。一案、「珍しく夫のゴルフ秋茜」。または「珍しく夫は(も)ゴルフに秋茜」。夫より夫の方がこの句に似合ふ。日常のささやかな変化も大切。「夫や」と「や」切れをするより、普段着の言葉がふさはしい。

二句目。色とりどりに咲くコスモスの花園。愉しんで花園を出てきてみたら服に牛膝がびっしり付いてゐた。わたしも似た経験がある。取るのに苦労したが嫌ではなかつた。この句、寓意とも読んで楽しんだ。

三句目。「久々の」にすることをしないで政治家たちには「一矢報る気が見える。政治家と家を付けたが、家には「一道を専門にする人、それにすぐれている人」とある。専門外の大臣が開き直つてゐたり、しどろもどろになつてゐる姿を見て、「家」は間違へたと気がついた。

が適当な語彙が思いつかない。今までの言葉では表せない新人類なのであらう。「柿をむく」でアジ俳句にせず、静かに確り政治を見てゐる庶民の眼がある。

森 なほ子

梨剥くや被災画面の泥の床
ハンカチの一枚で足る秋時雨
冷ややかや注意受けたる後の黙

一句目。偶然にも今月の敏子さんの「久々の国会中継柿をむく」と句の構造が似てゐる。テレビを見ながらの句である。似てゐるが、「梨剥くや」と「柿をむく」は耳にすると印象が異なる。前者は思ひを外側に発散するが、後者は眩くような感じがする。「や」の切れの強さであらう。

二句目。秋の時雨で濡れた衣服もハンカチ一枚で拭くほどの軽い濡れようだといふ。「足る」は説明調で少々硬いかなと思ふ。「ハンカチを一枚ほどの秋しぐれ」

三句目。注意を為した人が相手の黙に戸惑つてゐる。「冷

ややか」は秋の冷気に触れた季語。心理的に使ふのをよく見かける。某誌で「涼やかに挫折を語る法話かな」に「この句、例えば瀬戸内寂聴の法話を想像したらいいでしょう。挫折が人生の糧になることを淡々と話しています。「涼やかに」はもちろん心の涼しさです。」とこのような使用法を認めてゐる。わたしは素直に季語の本意そのままに使ひたい派である。

田中 藤穂

ごろ寝する冬瓜と三夜過ぎしたる
どこからか木犀匂ひ師の忌日
平成も終る秋なるチンドン屋

一句目。「三夜」はミヤかミヨと読むのかサンヤと読むのか迷つた。サンヤは月の三日の夜。またその夜のこと。または新婚三日目、とあるからこの句では読まない。「一夜」はイチヤ・ヒトヨと読み、「二夜」は著名な「妻二夕夜あらず二夕夜の天の川」にあるフタヨ。三日間の夜の「三夜」は読みが見つからなかった。三日にするか

三晩にするか迷つたが全て作者に丸投げをすることに決定。些末なことでしたが、句はゆつたりとした擬人法が不自然ではない冬瓜の存在がおもしろかった。余計なことだが冬瓜はトウガとも読むとあつた。

追記。「いづれをも思ひたえじとするほどに三夜に一夜もめぐりあふかな 藤原雅経」の和歌を見付けた。ミヨモヒトヨモと読むのだらう。辞書になくともミヨでよささう。回り道をしたものだ。

二句目。生涯に先生と呼ぶ人は掃いて捨てるほどあるが、師と称ぶ人はさうはゐない。大切な師弟の間を木屋の花の芳香が漂つてゐる。

三句目。来年の四月三十日。この日が平成の終る日である。ブラウン管の中の小渕恵三を思ひ出す。平成の次の時代を何方がどんな顔で紹介するのであらう。八田木枯氏もチンドン屋が好きで数句作られ「二土の会」といふ『暖流』支部句会に出句された。わたしは勿論、木枯さんも良くチンドン屋がここに登場したと喜ばれるに違ひない。

赤座 典子

暮の秋こまつ座の法被藍薄る
軋轢と読みもむづかし秋刀魚焼く
コンビニの人の早口冬隣

一句目。分からぬことは辞書をひく。いや辞書がなければこの欄を書けない。それほどに知らぬ言葉、事柄が毎月登場する。辞書で分からなければスマホに問ひかける。井上ひさしが逝かれて八年ほどになるといふ。その過ぎ去つた時間を「藍薄る」と。井上ひさし追悼の一句。

二句目。「軋轢と読みもむづかし」といひながら暗に対人関係に戸惑つてゐる心を表してゐる。この句では、秋刀魚は刺身では駄目、もうもうと煙を上げて秋刀魚を焼かなければ済まぬ。勿論現今のこと、実際に煙を上げて秋刀魚を焼いてゐる訳ではない。心中の煙である。

三句目。同感、同感。分からぬ時、聞き直すかそのまま曖昧に過ごすか瞬時に判断。疲れることである。「冬隣」の添ひようがやはらくてよい。先日、留守電に連絡乞ふと電話番号が吹き込まれてゐた。早口で書き留めら

れず、勿論記憶するなど望外。三四回聞き直し書き留めた。相手のことを思はないゴーマンな会社からの連絡であった。

大日向幸江

残菊や大黒さんの腕の中
冬蝶の風に逆らふ事もなく
年老いた猫をからかふ冬の蠅

一句目。作者の御夫君は任職を爲されてゐた。ので「大黒さま」は大黒天か梵妻か迷った。が素直に大黒天様と読むことにした。調べたついでに「元来大黒さまは厨に祀られた神であるから、寺院の飯炊きをいいたまた私妾や妻をいうようになった。」この句は大黒様に残菊が供へられてゐるのであらう。「腕の中」に作者の優しさが伺へる。屋内か野外か迷ふところである。

二句目。冬でも蝶の機嫌の良い時は舞ふこともある。風に逆らはず飛ぶのも蝶の冬の過ごし方。冬蝶と作者の同化。

三句目。秋も末のうそ寒い日、夕食の時大きな蠅が部屋の中をどびまわりテレビ鑑賞?の邪魔をされた。何とかしようと思つたがあしらはれてしまった。「年老いた猫」がわたしに見えてきた。「年」はなくともとおもつたが、あつた方が良いと決めた。

七郎衛門吉保

身に沁むや日本滅ぼすプラの塵
微少プラ人体にありそぞろ寒
秋暁や医に転用のプラストロー

吉保さんは現在進行形の問題を採りあげる。世に蹤いてゆけないわたしには勉強の好材料。今月は「プラ」。辞書にボツワナの通貨単位とある。勿論掲句のプラの意味ではない。プラスチックを詰めたやうだ。「身に沁むやマイクロプラスチックの塵」。地球規模で問題になってゐるので、中七は疑問。

現代人は忙しいのか、情報が多いからか言葉短くする傾向がある。だれもパーソナルコンピューターとはい

はぬ。その内プラスチックも「プラ」で通るかも知れぬ。

落語の寿限無の元になった噺は江戸時代だと聞く。

石森 理和

ずんぐりの青鷺じいと待つ浅瀬
蜜柑柿林檎卓上秋日和
天高しロシア正教会の建物

一句目。直写、正に直写。潔い素直さ。「ずんぐり」「じいと」と雅語とは趣の違ふことばで活き活きとした表現を得た。

二句目。今月の理和さんの句は三句とも直写といつてよいだらう。卓上には秋の果物。磨かれた硝子の向かうの庭前は秋日和。

三句目。「天高し」で天ばかりでなく建物まで高く見える。どこの地でも良いのだが、函館の丘の上のロシア正教会を思ひ出した。「建物」は直写といつても味気ないので、「天高しロシア正教会の塔」。

秋川 泉

鉦叩盤台に盛るちらし寿司
さはさはと雨秋火花かすみ散る
樽柿の頃合見入る家人たち

一句目。盤台は「魚屋が魚を入れて運ぶ浅くて広い楕円の盤」と知る。一心太助が天秤棒の両端に下げてゐるものか。その大きな盤台に盛るちらし寿司は何人前だらう。明るい灯りの下でのにぎやかな集まりが想像できる。「鉦叩」でちらつと法事かなと思つたがわたしの思ひ過ぎであらう。

二句目。火花は秋の季語。あらためて「秋火花」といはなくともよい。「かすみ散る」が雨の中の火花をよく表現されてゐる。「さはさはと雨の火花のかすみ散る」。

三句目。樽柿の食べ頃を期待して待つ家族。「家人たち」といふと作者は蚊帳の外にゐるようで淋しい。作者一人が見入ることで十分だが、家族への捨てがたい思ひを大切にするならば、「樽柿の食べ頃見入る五人かな」といふような作り方もある。

「秋雨る」

佐藤 喜孝

はるさめ・さみだれ・あきさめ・しぐれ。どれも四季をりをりの雨の呼び名。

しぐるるや田のあらかぶも黒む程 芭蕉

名詞を動詞として使っている。名詞を動詞にするにはルをつける。(このやうな話は定権じようの分野)。芭蕉には五月雨・春雨の句はあるが、五月雨・春雨の句はない。秋の風・秋風は作っているが秋雨・秋の雨は使われてもぬないやうだ。

ここまでは枕。わたし、二度ほど句会で失敗してゐる。ひとつは「薄氷」を「うすらへる」とやってしまった。人に云はれるまで気がつかなかった。も一度は「濃い」を「濃ゆ」と。をかしいなどはちょっとおもったが出句して恥を掻いた。こう書けば二度としないかなと自己に期待して書いた。

以下加藤都平著『俳諧志』(鈴木道彦の項)より抜き書き。

『続蔦本集』に見える次の妙句は道彦一代の快作であろう。

ねもごろに春雨る哉^{なま}柳の千枝

「しぐるる」「さみだる」とは一種伝統的の遺産にひとしく、これに道彦の「はるさめる」が一枚加わった。さらに、これに「秋さめる」が出てくれば四季一揃いになるとは高木蒼梧氏の弁。かつて、これらを念頭に「とにかくは秋雨るなり秋の暮」と吟じ、拙句集『秋の暮』に収めたことではあった。



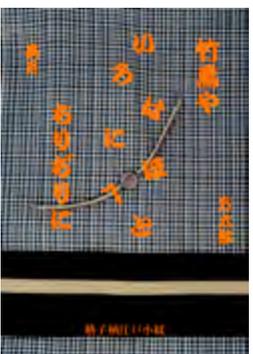
日本文化「着物と俳句」

七郎衛門吉保

二〇一四年十一月二十二日に催された傳句会日比谷公園吟行に、篠田純子さんからの「着物姿を見せにきて」のお誘いに乗ったことから、私の着物と俳句の接点が始まります。恭子さんも裕子さんもご健在だった頃です。

当日は勿論句作をすることはなく、吟行とは？句づくりとは？などを外側から眺めていただけでしたが、帰りがけに他の方々からも「来月も傳句会に着物を見せに来て」との揶り言葉に乗ってしまったのです。

そして翌月から、句を準備して着物姿で参加する、俳句パターンが私のライフワークに追加されました。



着物を好むようになった背景には、日本文化を知りそれをきっかけに「世界の平和作りに貢献することが出来れば」という願望がありました。

またこの背景には、私の価値観として持ち続けてきた「戦争と差別は絶対反対」があります。

前者については、世界中の人々がお互いを理解しあい、友達付き合いの度合いを深めることによって可能ではと考えています。

日本文化を少しでも理解し深めた上で、世界の方々との接点を持つ旅の、道具立ての一つとして、着物は大きな効果を發揮しています。お陰様で俳句もそのことに大きく作用しています。

余談になりますが後者については、今や社会的な重要課題となっている「格差社会」と「非正規雇用」の加害

者的立場に近くなることを嫌い、早期退職を選択してきました。

一年ほど前に、佐藤主宰より「あを」の扉に一年間掲載する、何かを準備してほしいと依頼されました。

そこでテーマを表題の日本文化「着物と俳句」とし、着物は箆笥の中より、季節に合った長着と帯と羽織紐の組み合わせとしました。

俳句は、この着物に見合った句を探したいと考えていましたが、なぜ久保田万太郎の句を選んだのか、その記憶が定かではないのですが、万太郎の、分かり易くて洒落な句にあこがれているのかもしれない。

吐く

吐く息の大きく白し馬の顔
むくげ咲く生きる証に言葉吐き
雲を吐くよはひとときづく牡丹櫛

鈴木多枝子
関口 ゆき
佐藤 喜孝

掃く

袋蜘蛛ただひたすらに掃き出だす
鴉の贅山門不幸庭を掃く
死んだふりしてかなふんは掃き出され
さるすべり帚で水を掃き移す
夏落葉大木の根に寄せて掃く
棲みなれて行人親し落葉掃く
落椿一花拾ふて掃き清め
玉椿掃いて熱めに朝のお茶
掃くほどはなけれど路地の春の雪
坂道や隣もうちも落花掃く
掃きよせし木屋の花なほ匂ふ
春の雷遠くに聞きて庭を掃く
寺通り作務僧の掃く落むくげ
掃き終へし躰の辺も木の葉雨
掃き寄せて根元明るし落椿
蟬の穴掃ききよめたる塵入りぬ
落葉掃く箒の音の軽ろきかな
ホームレスの枯葉を掃けり朝の雨

竹内 弘子
後藤 志つ
栢森 定男
佐藤 喜孝
鎌倉喜久恵
田中 藤穂
石森 理和
石森 理和
森山のりこ
田中 藤穂
鎌倉喜久恵
森山のりこ
鎌倉喜久恵
須賀 敏子
早崎 喜孝
篠田 純子

枯葉掃くことも余生の励みとし
春の宵門掃く人に会釈して
掃苔や花となりたる母なりし
落葉掃く蜥蜴かくれてをりにけり
落葉焚出来ぬ法律落葉掃く
落葉掃き猫と話の出来る人
いつまでも冬物を着て椿掃く
庭を掃く国旗掲げる憲法記念日
薄水のごとく天あり道を掃く
落葉掃く音を遠くに深眠り
葉唐辛子賣が来し道掃ききよめ
南天の花のこぼるる路地を掃く
よくあるさー台風一過道を掃く
朝夕と掃き集めたり花南天
主婦若し落葉掃きみる身のこなし
掃き集め小山なしたる紅椿
垣根越落葉掃き寄せ湿りをり
男らの二人一組落葉掃く
椿掃く日に戻りぬと伝へたし

履く
小春日の日展観むと靴を履く
梅雨晴間竜馬の像のブーツ履く
新しき靴履いてきし花の客
田中 藤穂
鎌倉喜久恵
鎌倉喜久恵
早崎 泰江
長崎 桂子
芝 尚子
赤座 典子
田中 藤穂
長崎 桂子
赤座 典子
田中 藤穂
須賀 敏子
須賀 敏子
須賀 敏子
須賀 敏子
田中 藤穂
七郎衛門吉保
黒澤 佳子
森 なほ子
赤座 典子
田中 藤穂
森山のりこ
田中 藤穂

春の宵踵の高い靴を履く
今年竹徳利に袴履かすやう
晩夏光一足を履き潰したる
靴緩く履きて男の子夏休

穿く

穿かず捨てぬ靴箱を積む十二月
白足袋を穿く敬老の日なりけり
生身魂慌ててズボン穿きにけり

竹内 弘子
堀内 一郎
篠田 純子

剥ぐ

馬面の仕置きするかに皮を剥ぐ
船虫の巖剥ぐごとく群れて逃ぐ
ののしりて枇杷の皮剥ぐ丹念に

関口 ゆき
渡邊 友七
堀内 一郎

貌

鼻先を貌の通りし夏野かな
初時雨昨夜の夢は貌にやる

白壁

着岸す白壁のごとき鮪船
白壁紀にさびしい人の足跡が

竹内 弘子
佐藤 喜孝

白衣

卒業の実験白衣着つつ馴れ
白衣の天使と言葉をなぞり夏終る
白衣の女医に涼しき胸を触れらるる

篠田 純子
藤野 寿子
篠田 純子

白雲

風花のあと白雲の速かりし
大でまり白雲となり滝となり
甲斐の山雨後の白雲とり捲ける
時ここに白雲に化し墓の梅
次ぎ次ぎと白雲迎ふ白木樫
居残りの夜の白雲沈丁花
白雲や何かと言ふうちに春
白雲木の花いや高くそよぎけり
白雲木花仰ぐ樹下湿りをり

白砂

白砂青松故郷排気ガスに秋思

白紙

一面に落花白紙を踏む畏れ
月天心白紙のままの句帳閉つ
身辺りを白布白紙に十一月
日記帳ときどき白紙石路の花
実在論白紙へ羽蟻落ちにたり

博奕

博打ならまだ勝目あり三の西
春の燈や高き声洩る博奕宿

薄暮

来し道を望む薄暮の登山小屋

佐藤 喜孝
鎌倉喜久恵
竹内 弘子
石森 理和
早崎 泰江
井上 石動
井上 石動
篠田 純子
田中 藤穂
長崎 桂子
堀内 一郎
鎌倉喜久恵
堀内 一郎
芝宮須磨子
定梶じょう
篠田 純子
井上 石動
須賀 敏子

あとがき

一年お世話になりました

相変はらずバタバタしてゐる内一年経ってしまつた。七郎衛門吉保さんには一年間ありがとうございました。途中プリンタが不調になりプリントまでお願いしてしまつた。大いに助かつた。プリンタは飽きるほどクリーニングを繰り返したがインクが減るばかりで改善しなかつた。プリンタは修理より新品を買つた方が安いのでついに追加購入した。久保田万太郎と和服地はとても良い取り合はせだつた。

出句数

これは今月気がついたので、会員は一月八句あをに投稿するのに、わたしだけ五句と樂をしてゐた。自分の尻を叩くつもりでわたしも八句作ることにした。

遺句

佐藤恭子の俳句のメモを、発表すみかと調べたら未

発表の句が見つかった。作品集の後尾に載せさせて頂く。わがままをおゆるしを願ひたい。わたしに隠れて本当によく句を作り辞書を読んでゐた。わたしたち夫婦は自然に触れる機会が少ないからかいつおもにか言葉が好きになつたやうだ。お陰でいろいろな言葉を恭子さんから教はつた。(喜孝)

二〇一八年十二月号

発行日 十二月十二日

発行所 東京都中野区中央2-50-3

電話 090-9828-4244

ファックス 03-3371-4623

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット／松村美智子・福井美佐子・ティリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

ゆうちょ銀行(普)(店番018)4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)